大門通り界隈一束

続旧聞日本橋・その一

長谷川時雨

青空文庫

あたしの古郷のおとめといえば、江戸の面影と、香を、いくらか残した時代の、どこか歯ぎれのよさをとどめた、雨上りの、杜若のような下町少女で、初夏になると、なんとなく思出がなつかしい。

土一升、金一升の日本橋あたりで生れたものは、さぞ自然に恵まれまいと思われもしようが、全くあたしたちは生花の一片も愛した。現今のように、ふんだんに花の店がない時分だから、一枝の花の愛しみかたも格別だった。紅梅が咲けば折って前髪に挿し、お正月の松飾りの、小さい松ぼっくりさえ、松の葉にさして根がけにした。山吹の真白なじくも押出して、いちようがえしへかけた。五月の節句には菖蒲の葉を前髪に結んだり、矢羽根に切ったのを簪にさしたものだった。

新藁は、いきな女の投島田ばかりに売れるのではなく、素人でも洗い髪を束ねたりしてよく売れた。燕の飛ぶ小雨の日に、「新藁、しんわら」と、はだしの男が臑に細かい泥を跳ねあげて、菅笠か、手ぬぐいかぶりで、駈足で、青い早苗を一束にぎって、売り声を残していった。

水玉という草に水をうって、涼しくかけたものだが、みんな一時のもので、赤くひからびるまではかけていない。直にかけかえる手数はいとわなかった。一たい、平日から油染んだ髪をきらっていたから、菅糸だって、葛引だって、金紗（元結ぐらいな長さの、金元結の柔らかい、縒のよい細いようなのを、二、三十本揃えたもの。芝居の傾城の鬘にかけてあるのと同じ）だ

って、プツンと断って、一ぺんかけただけだった。

深窓な育ちでも、どこか女伊達めいた気風をもって、おそろしく仁義礼智の教えを守って——姿の薄化粧のように、魂も洗おうとした。この二行ばかりの文章は、文飾のようにもとられようが、濃かれ薄かれ、そんな気持ちはたしかにあったのだ。人と、その性質は別としても、その地方色としては——

古い日記をくりかえして見ると、父が話してくれたことが書いてあるので、此処へ抜いて見よう。

——父の晩酌のとき、甥の仁坊のおまつりの半纏のことから、山王様のお祭りのはなしが出る。仁の両親とも日本橋生れで、亡なった母親は山王様の氏子、此家は神田の明神様の氏子、どっちにしても御祭礼には巾のきく氏子だというと、魚河岸から両国の際までは山王様の氏子だったのが、御維新後に、日本橋の川からこっちだけが、神田明神の氏子になったのだと、老父が教えてくれた。

あたしたちは神田明神へお宮参りをしましたが、お父さんは山王様へお宮参りにいったのですかときくと、そうだといわれる。

それからそれへと古いはなしが出る。以下は老父の昔語り——

玄冶店にいた国芳が、豊国と合作で、大黒と恵比寿が角力をとっているところを書いてくれ

たが、六歳か七歳だったので、何時の間にかなくなってしまった。画会なぞに、広重も来たのを覚えている。二朱もってゆくと酒と飯が出たものだった。

国芳の家は、間口が二間、奥行五間ぐらいのせまい家で、五間の奥行のうち、前の方がすこしばかり庭になっていた。外から見えるところへ、弟子が机にむかっていて、国芳は表面に坐っているのが癖だった。豊国の次ぐらいな人だったけれど、そんな暮しかただった。その時分四十位の中柄の男で勢いの好い、職人はだで、平日どてらを着ていた。おかみさんが、弟子のそばで裁縫をしていたものだ。武者絵の元祖といってもいい人で、よく両国の万八――亀清楼のあるところ――に画会があると、連れていってくれたものだ。

国芳の家の二、三軒さきに、鳥居清満が住んでいた。

大坂町の雷師匠は、冬でも表を明っぱなし、こまよせから、わざと見えるようにしてある。上り口の板敷のところに、いけない児童を空俵に入れたり、火のついた線香をもたせたりして、自分の傍には弓の折をひきよせておいて、がみがみ大声で呶鳴りちらしている。空俵へ入れるのは、これから河へ流してしまうというのだ。他のおとなしい児童がふるえながら詫すると、それをしおに俵から出してやる。見えすいた広告法だが、厳しい師匠にやらなければ、いけないと思っている、無学町人の親たちには、それが大層評判がよかった。

国芳の家のそばにも手習師匠があった。私が七歳であったころに、四十位な年配で、小笠原の浪人加賀美暁之助という人だった。この人のほうは立派な人物で、大橋流の書も佳いし、絵

は木挽町の狩野の高弟で、一僊といって、本丸炎上の時は、将軍の居間の画を描いたりしたほど出来たし、漢学も出来る、手をとって教えてもらった。撃剣もおしえた。色は黒かったが人品の好い人で、御家内も武家の出だから品のある女だった。

三馬に逢ったことがある。そうさ、五十四、五に見えた。猿のしるしのある家で、化粧水を売っていたっけ。倉の二階住で、じんきょやみのくせに妾があった。子供心にも、いやな爺だと思ったよ。

歌川輝国は、宅のすぐ前にいたのさ。うまや新道――油町と小伝馬町の両方の裏通り、馬屋新道とは、小伝馬町の牢屋から、引廻しの出るときの御用を勤めるという、特別の役をもっている荷馬の宿があったから――の小伝馬町側に住んでいた。くさ双紙の、合巻かきでは、江戸で第一の人だったけれど、貧乏も貧乏で、しまいは肺病で死んだ。やっぱり七歳ぐらいから絵をおしえてくれた。その時分三十五、六だったろう。豊国の弟子だったから、豊国の描いたものや、古い絵だの古本だの沢山あった。種彦がよこした下絵の草稿もどっさりあった。私は二六時中見ていても子供だからそんなに大切にしなかったし、おかみさんのおもよというのは、竈河岸の竈屋の娘で、おしゃべりでしようのなかった女だから、輝国が死んでから、そういうものはどうなってしまったかわからなかった。

住居は入口が格子で、すこしばかり土間があって、二間に台所だけ、家賃は（今の金で）三

十銭位だとおぼえている。それでもお酒は大好きで、たべものはてんやものばかりとっていた。貧乏でもそういうところは驕っていた。芝の泉市だの、若狭屋だのという絵双紙屋から頼みにきても、容易なこっては描いてやらなかった。その時分、定さんという人がよく傭われてきたものだ。輝国が絵――人物や背景を描くと、その人は、軒だとか窓だとか、縁側だとか、襖とかいったものの、模様や線をひきにくる。腕はその当時いい男だといわれていたのに、弁当も自分持ちで、定木も筆も持参で来て、ひどい机だけかりて仕事をして、それで一日がたった天保銭一枚（当時の百文・明治廿年代まで八厘）。今の人がきくと嘘のようだろう。

寿鶴亭という八人芸（時雨云、拙著『旧聞日本橋』の中には、この寿鶴の名が思いだせないで○○斎と書いたのと同じ人）の上手なのがすぐ近所にいた。娘に、油町の辻新という大店の権助を養子にして春米屋をさせ、自分たちは二階住居をしていた。賑やかな人で、自分の家の二階で八人芸をやっていると、まったく瞞されるほど、大勢寄っているようにきこえた。かみさんは新宿あたりの上りもの（遊女の）で、強者だった。孫娘のおつるというのを手塩にかけて育てていたが、それが後に妾にいって大層出世をしたとかきいた。たしか、大鳥圭介さんのところへだときいた。

辻新といえば、あすこの家の頭――出入りの鳶職――が、芝金の直弟子で、哥沢の名とりだった。めっかちの、その男のつくったのが「水の音」という唄だ。自分の名の音がよみこんである――

今日はこの位にしておこうといって、父上は枕につかれる。こういう事は、いつもきき流しにしてしまって、あとで記録しておけばよかったと、いつも後悔するから、今夜こそ書いておこう。

と止めてある。父は天保十三年の生れ、七歳の時といえば嘉永元年だ。外国船がしきりに渡来して、世の中は刻々にむずかしくなっていたころだと思う。

青空文庫情報

底本：「旧聞日本橋」岩波文庫、岩波書店
1983（昭和58）年8月16日第1刷発行
2000（平成12）年8月17日第6刷発行
底本の親本：「桃」中央公論社
1939（昭和14）年刊行
入力：門田裕志
校正：松永正敏
2003年7月4日作成
青空文庫作成ファイル：
このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（http://www.aozora.gr.jp/）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

大門通り界隈一束
続旧聞日本橋・その一

2026年10月1日　第二版

奥　付

発行　　青空文庫

著者　　長谷川時雨
URL　　http://www.aozora.gr.jp/
E-Mail　　info@aozora.gr.jp

作成　　青空ヘルパー　　赤鬼@BFSU
URL　　https://aohelp.club/
BiliBili　　https://space.bilibili.com/10060483

Special Thanks
　青空文庫　威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー http://aohelp.club/
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
http://tokimi.sylphid.jp/